

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月6日現在

機関番号：11601

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720087

研究課題名（和文）20、21世紀イギリス文学・文化における〈第一次大戦神話〉の系譜の研究

研究課題名（英文）‘The Myth of the First World War’ in Twentieth- and Twenty-First-Century English Literature and Culture

研究代表者

霜鳥 慶邦（SHIMOTORI YOSHIKUNI）

福島大学・人間発達文化学類・准教授

研究者番号：10400582

研究成果の概要（和文）：本研究は、20、21世紀イギリス文学・文化において、一部の反戦的文学に基づいて形成された第一次大戦のイメージがどのように支配的記憶となり継承され神話化されてきているのかを明らかにした。

研究成果の概要（英文）： This study clarified how the image of the First World War based on anti-war literature has been inherited and mythologised to become the dominant memory of the war in twentieth- and twenty-first-century English literature and culture.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学

キーワード：英米・英語圏文学、第一次大戦

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は、平成18-20年度科学研究費補助金（若手研究（B））の研究課題「第一次大戦（間）期英国文学・文化における第一次大戦後遺症の研究：身体・性認識を中心に」の発展的延長線上に位置する研究課題である。前研究課題では、大戦（間）期のイギリス文学・文化に焦点をしばって、大戦の後遺症と呼ぶべき現象の分析を行なった。本研究は、前研究課題の成果を踏まえつつ、さらに前研究課題には欠けていた、大戦当時から現代までの通時的射程を設定することで、第一次大

戦の記憶が形成・継承・歪曲され、さらに神話化されるプロセスを大きな歴史的枠組みの中で明らかにしたいという動機に基づいている。

(2) 世界は、2014年に、第一次大戦勃発100周年という決定的瞬間を迎えようとしている。本研究は、第一次大戦当時から現代までのイギリス文学・文化における大戦の記憶の系譜を検証することで、2014年という決定的瞬間にねらいを定めて、第一次大戦の記憶の現代的意義について積極的に情報を発信するための基盤作りという意味を持っている。

## 2. 研究の目的

本研究は、第一次大戦の時代から現代までのイギリス文学・文化において、一部の反戦的文学（Siegfried Sassoon, Robert Graves, Wilfred Owen, Edmund Blunden, Eric Maria Remarque など）の強い影響を受けた悲観的・否定的大戦認識が構築され、それが大戦の「正統な」記憶としてその後の世代に継承され、支配的な大戦の記憶として浸透し、さらに神話化されていく系譜を明らかにすることを目的とする。具体的には、次の4点についての考察を中心に進める。

(1) 従来の研究は、主に1920年代末から1930年代に出版された Remarque（ドイツ文学の英訳版）、Sassoon, Graves, Owen, Blunden に代表される反戦的文学に〈第一次大戦神話〉の起源を求めてきた。だが、近年の研究によって、実際には、この時期の大戦文学には、反戦思想という一枚岩的イメージには回収しきれない多種多様でアンビヴァレンスに満ちた大戦認識が混在していたことが明らかになってきている。本研究では、当時のさまざまな分野のテキストを分野横断的に検証し、当時の大戦イメージの多様性を復元させ、その文脈の中における戦争詩人の相対的位置を再検討することで、〈第一次大戦神話〉の形成の起源を特定の反戦文学に求めようとする従来の説を批判・修正し、新たな〈第一次大戦神話〉起源説を提示することを目指す。

(2) 第二次大戦の経験が〈第一次大戦神話〉の形成に与えた影響を、当時の一次資料を分野横断的に検証しながら考察する。さらに、第一次大戦勃発 50 周年を迎え、多くの大戦文学作品が生まれ出された 1960 年代のイギリスの文学・文化が、〈第一次大戦神話〉形成において決定的な役割を果たしたという先行研究に基づく仮説をもとに、当時の文学・文化現象を検証し、〈第一次大戦神話〉形成の過程を実証的・理論的に考察し、〈神話〉形成の文化的力学を明らかにすることを目指す。

(3) Pat Barker, Sebastian Faulks, Theresa Breslin をはじめとする現代の第一次大戦文学に関する研究は、個別の作品論・作家論のレベルに留まっているのが現状である。本研究は、先行研究による個別の作品・作家に関する研究成果を踏まえつつ、現代作家の作品群を、〈第一次大戦神話〉という大きな枠組みの中に配置して考察することで、現代作家の系譜的位置づけを明らかにすると同時に、現代イギリス文学における〈第一次大戦神話〉の諸相を明らかにすることをねらってい

る。

(4) 第一次大戦で西部戦線での塹壕線を体験した英国陸軍兵士の最後の生き残りであり、「最後のトミー」(‘the Last Tommy’) として有名な Harry Patch (1898–2009) の歴史的・現代的象徴性を明らかにする。国家的シンボルにまで化したこの人物は、従来の大戦研究においてほとんど本格的に論じられていない。Patch に関する分析を研究対象に取り込むことによって、従来の〈第一次大戦神話〉研究をさらに一步前進・アップデートさせ、〈第一次大戦神話〉の最新の情報を提示し、その現代的意味を明らかにすることを目指す。

## 3. 研究の方法

(1) Wilfred Owen, Siegfried Sassoon をはじめとする第一次大戦期の戦争詩の読解・分析・比較。

(2) D. H. Lawrence を中心とする、戦間期イギリス文学・文化における第一次大戦の後遺症の分析。特に *Lady Chatterley’s Lover* に注目する。

(3) Pat Barker, Sebastian Faulks をはじめとする現代イギリスの戦争文学の読解・分析・比較を通して、〈第一次大戦神話〉の系譜における現代文学の位置づけを明らかにする。

(4) 第一次大戦の記憶に関する先行研究の整理・批判的再検討。

(5) インターネットを利用しての現代イギリスにおける第一次大戦関連の最新情報の収集・整理。特に、第一次大戦の退役軍人に関する情報と、第一次大戦勃発 100 周年にむけての世界の動向に注目する。

(6) イギリス、ベルギー、フランス、オーストラリアにて現地調査を行ない（博物館、共同墓地、記念碑など）、第一次大戦に関する一次資料と写真資料を入手し、研究の実証性を強化する。

(7) 大戦から現代までの大きな歴史的枠組みを設置し、先行研究の成果を踏まえつつ、(1)から(6)の研究成果を総合的にまとめることで、〈第一次大戦神話〉の系譜を明らかにする。

## 4. 研究成果

(1) D. H. Lawrence, *Lady Chatterley’s*

Lover を中心に、戦間期イギリスにおける第一次大戦の後遺症の特徴について明らかにした。具体的には、第一次大戦以後のイギリスを舞台にしているはずの *Lady Chatterley's Lover* におけるイギリスの風景描写に、西部戦線の泥風景のイメージの残滓が確認できるという現象を議論の出発点とし、戦後のイギリスに大戦の記憶が確実に取り憑き影響している様子を明らかにした。さらに大戦当時・戦後・現代の作家たち (Sassoon, Graves, Owen, Blunden, Hughes, Barker, Faulks など) のテキストを考察射程に収めながら大戦の記憶の系譜をたどりつつ、その今日的意味について考察すると同時に、大戦の記憶の関与者としての我々自身のポジションを自覚することの重要性について指摘した。この研究の成果は、日本ロレンス協会第 41 回大会でのシンポジウム「ロレンスと第一次大戦—文学、歴史、記憶、神話」で発表した。私は、司会・講師を担当し、「第一次大戦の〈記憶〉と今、そしてロレンス」という題目で発表した。シンポジウムでの口頭発表は、論文「『チャタレー夫人の恋人』、第一次大戦、記憶」として『D. H. ロレンス研究』第 21 号 (2011 年 3 月) に投稿・掲載された。この論文によって、日本ロレンス協会より、西村孝次賞を授与された。

(2) 第一次大戦で西部戦線での塹壕戦を体験した英国陸軍最後の生き残りであり、「最後のトミー」(‘the Last Tommy’) として有名な Harry Patch (1898-2009) の歴史的・現代的象徴性と、その象徴性を通して見えてくるはずの現代イギリスにおける大戦の記憶の諸相について考察した。具体的には、2007 年に出版された Patch の自伝 *The Last Fighting Tommy* を、大戦の記憶の系譜に置いて読むことで、Patch の個人的記憶とイギリスにおける大戦の集合的記憶の関係性について分析した。Patch の自伝の主要な特徴の一つとして、テキストが読者に喚起する強烈な既視感を指摘し、この現象の要因と効果と意味を明らかにすることが、「最後のトミー」の象徴性の解明につながるという仮説のもと、分析を進めた。

「最後のトミー」の自伝で回想される故郷の風景や戦争体験をはじめとする Patch の記憶が、大戦に関する他のさまざまなテキストと共鳴し合う現象を分析し、結果として、Patch の自伝が、一個人の兵士の記憶のレベルをはるかに超えた、「すべてのトミー」の(ための) 集合的・象徴的・普遍的・記念碑的物語としての性格が強いことを明らかにした。さらに、自伝出版後の「最後のトミー」が、「すべてのトミー」たちとともに神話化されていくプロセスをたどった。研究の成果は論文としてまとめ、学会誌に投稿した(本

報告書作成時点で査読中)。

(3) 「最後のトミー」であり「第一次世界大戦世代」の象徴であった Harry Patch がこの世を去り、「第一次大戦世代」不在の時代へと移行した現代イギリスにおいて、大戦の記憶がどのように継承され、あるいは変容し、そして今後どのような方向へ向かっていこうとしているのかを考察した。「最後のトミー」である Harry Patch の死は一つの時代の終わりという象徴的出来事であり、桂冠詩人からロック・バンドまで、さまざまなレベルで、Patch を追悼するための作品が発表された。これらの作品を比較分析することで、「第一次大戦世代」不在の時代の現代イギリスにおける大戦の記憶の諸相と行方について分析した。この考察作業は現在進行中であり、最終的な結論を提示することはまだできないが、現時点での成果として、次の点に着目しつつ分析を進めている。①一つの時代の終わりという雰囲気支配的なはずの現代イギリスに憑依あるいは回帰する第一次大戦のトラウマ的記憶(特に桂冠詩人 Carol Ann Duffy と前桂冠詩人 Andrew Motion の詩が注目すべきテキストとなる)。②現代イギリスにおける戦争詩人 Wilfred Owen の存在の大きさと重要性。③アフガニスタン戦争、イラク戦争といった現代戦争の表象における第一次大戦の記憶の影響の大きさ。そして逆に、現代戦争が第一次大戦の記憶に与える影響の大きさ。この研究テーマについては、今後、引き続き分析を継続させ、次年度以降の科学研究費補助金研究課題において深化・発展させていく予定である。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 1 件)

① 霜島慶邦 「『チャタレー夫人の恋人』、第一次大戦、記憶」、『D. H. ロレンス研究』第 21 号、2011 年、1-12 頁、査読有。

[学会発表] (計 1 件)

① 霜島慶邦、岩井学、三宅美千代、高橋章夫、「シンポジウム：ロレンスと第一次大戦—文学、歴史、記憶、神話」、日本ロレンス協会第 41 回大会、2010 年、早稲田大学。

[図書] (計 2 件)

① D. H. ロレンス研究会 (霜島慶邦ほか 15 名)、『ロレンスへの旅』、松柏社、2012 年、総 507 頁、担当 9-39 頁。

② D. H. ロレンス研究会 (霜島慶邦ほか 8 名)、『ロレンス研究—旅と異郷』、朝日出版社、2010 年、総 414 頁、担当 277-313 頁。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

霜鳥 慶邦 (SHIMOTORI YOSHIKUNI)  
福島大学・人間発達文化学類・准教授  
研究者番号：10400582